

中欧2011年夏

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2011年10月1日 受理)

1) ベルリンの壁建設50年

ドイツは第2次世界大戦で敗北した結果、全土を占領された。西部ドイツは米英仏の管理下に、中部ドイツはソ連の管理下に置かれ、東部ドイツはソ連領とポーランド領となった。ソ連占領地区の真ん中に首都ベルリンは位置していたが、その20区の市域は8区がソ連、6区が米、4区が英、2区が仏の管理下に置かれた。東西対立の激化とともにソ連の8区が東ベルリン、米英仏の12区が西ベルリンとなった。

1949年に米英仏占領下の地域で西ドイツ(BRD)が成立すると、ソ連占領地域にも東ドイツ(DDR)が成立する。西独は資本主義の道を取り、東独は社会主義の道を取る。経済発展競争が起きたのであるが、西独の経済復興は圧倒的で東西ドイツの経済格差は甚だしいものとなる。そうすると当然のことながら、東独居住者は西独に移住し職を得ようとする。しかしながら、東西ドイツの国境は厳しく管理されており、簡単に東独から西独に逃れることは出来なかった。しかし一つの抜道があった。ベルリンである。ベルリンは東西に分かれて管理されていたものの、一つの都市であるから、国電も、地下鉄も東西直通であり、東ベルリンから西ベルリンに移動するのは簡単であった。いったん西ベルリンに入ってしまうと、そこから空路で西独に移住できたのだ。

東独から流出した人たちは医者とか弁護士とか高級技術者等の専門職が多かった上に、青年労働者の脱出も多かった。その様な状態が続けば東独は間違いなく破滅したであろう。東独の独裁者ウルブリヒトはその様な状況を憂い東西ベルリンの間に壁を築き東側から西側への脱出を防ごうとした。後にウルブリヒトの寝首を掻いて後任の独裁者となったホーネッカーがその当時はウルブリヒトの懐^{ふところ}刀であった。ウルブリヒトはホーネッカーを指揮官に任命し隠密に事を図らせたのであった。

1961年8月13日に突然ベルリン全域において東西の交通が遮断され、境界に有刺鉄線等設置される。そこには東独軍、東独警察、東独武装民兵が投入されベルリンの壁の建設が始まるのである。この壁は1989年11月9日までの28年間、東西ベルリンの交流を遮断したのである。



図1. ベルリンの壁建設本部という看板

筆者は2011年8月19日にベルリンに到着した。ベルリンの壁50周年の展覧会が開催されているのではないかと思い調べてみたが、特に大きな催しは無かった。偶然の事ではあるが、筆者が滞在したホテルの隣の建物の前にベルリンの壁建設本部という看板が設置されていた。関心を持って調べてみるとその建物は東独時代の東ベルリン警視庁だという。その建物の2階（日本流にいうと3階）にホーネッカーが陣取り、ベルリンの壁建設の計画と指揮をしたのだという。残念ながら、その部屋を見学することは出来なかった。東ベルリン警視庁が使用した建物は、現在もドイツで有力百貨店であるカールシュタット社が本部をハンブルクからベルリンに移転するため1928年に当時ベルリン最大のオフィスビルとして建設したものだという。1936年にはさらなる拡大のためほかの建物へ移転し、この建物は帝国統計局に使用されることになった。ユダヤ人迫害のためのユダヤ人人口統計は専らこの建物の中で行われたそうだ。



図2. 旧東ベルリン警視庁の建物

戦後になって東ベルリン警視庁として使用されたので内部を大幅に改築し大きな監獄（留置場）を増設した。その監獄は一般犯罪人のみならず一部の著名な政治犯をも収容したそうだ。ドイツ統一後も1996年までは国外追放者拘束所として使用されたそうだ。現在は使用されていないが、『グッドバイ、レーニン』などの映画撮影に使用される事があるそうだ。その監獄は非公開であるが1年に1度のみ公開するとの事で、運が良いことに筆者のベルリン滞在中にその日が来るとの事であった。その日に早速訪問してみると、現在この建物を使用しているベルリン市（州）政府文部省の広報担当者が案内してくれた。ベルリンでは何の変哲もない建物がこの様に歴史的な意味を持っているのだと痛感した。



図3. 旧東ベルリン警視庁の監獄（留置場）

2) ドイツ連邦内務省訪問

8月20日、21日と恒例のドイツ連邦政府中央官庁の一般公開が行われた。今年は連邦内務省と連邦広報部を訪問した。建物自体は両者とも新築物件で歴史的な意味はなく、その意味では面白みが無かった。連邦内務省は連邦国境守備隊から改組された連邦警察の元締であるから、会場の警備は総て連邦警官のみであった。例によって大臣室等建物の内部を見学したが他省庁に比べ、憲兵が警備していた国防省に次いで厳しかった。大臣室等の

写真撮影は禁止されていた。

連邦内務省の管轄は連邦警察のみならず多岐にわたる。ドイツ国内のスラブ系少数民族であるゾルベ人展示コーナーに数名の人がいた。その中の1人に、あなたはゾルベ人かと尋ねると、他の1人が、この方は少数民族や外国から来たドイツ居住者担当の内務副大臣だと言う。筆者の姿^{すがた}形は明らかにドイツ人とは異なる。良い宣伝になると思われたらしく、副大臣たちと記念写真を撮りたいという。広報部のカメラマンが写真撮影してくれたので、筆者の馬鹿チョンカメラを取り出して、ついでにこのカメラでも撮影してくれと頼むと、快諾してくれた。

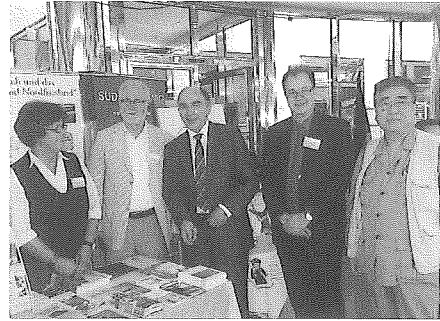


図 4. 左から 3 人目が内務副大臣ベルグナー博士、右端が筆者

内務省の他に連邦政府広報部を訪問した。その一部門として東独総括局があった。そこに規模は小さいがベルリンの壁建設の展示があった。これが唯一のベルリンの壁の展示であった。ドイツ統一から 21 年も経つと毎年、壁の展示会を大々的に行なう事も出来ない様だ。

3) ブルノ訪問記

多民族国家でハプスブルク家の統治で統一されていたハプスブルク帝国が、第 1 次世界大戦敗北の結果、1918 年 11 月には各民族ごとに分離独立する事になる。オーストリア皇帝領であったボヘミア、モラヴィアとハンガリー王領であったスロヴァキアがチェコスロヴァキアとして独立するのはその時であった。

しかしながら、チェコスロヴァキアは独立の時点から大きな問題を抱えていた。チェコ人が人口の過半数を占めていなかった事である。人口の三分の一を占めていたドイツ人、四分の一弱を占めていたスロヴァキア人と言う少数民族を抱えていたからである。特にボヘミアとモラヴィアではドイツ人人口が半数に近かった。

敗戦国ドイツ、オーストリアに対して英、仏、伊、米、日等の連合国が 1919 年に締結したヴェルサイユ条約、サンジェルマン条約は民族自立の原則を掲げていたのであるから、少数民族と言うには余りにも大きな存在であったドイツ人にも自決の権利を与えるべきであったとオーストリアの建国の父であったカール・レンナーも主張している程である。

1933 年にアドルフ・ヒトラーがドイツで政権を握るや否やチェコスロヴァキアのドイツ人居住地域をドイツに統一しようと大きな圧力を掛けたのである。泥棒にも三分の道理と言うが、ヒトラーの主張には三分以上の道理が有ったのである。1938 年にはドイツ人の国でヒトラーの出身地でもあったオーストリアがドイツに併合されるとチェコスロヴァキア在住ドイツ人の自治権取得、さらにはドイツへの併合を望む運動が拡大しチェコスロ

ヴァキア政府が押さえる事が不可能となる。その様な状況の下でミュンヘンにおいて英、独、仏、伊の首相が会談し、チェコスロヴァキアの解体を決めてしまう。

ボヘミア、モラヴィアのドイツ人居住地域(ズデーテンランド)はドイツに併合され、ボヘミア、モラヴィアのそれ以外の部分はドイツの保護領となる。チェコ人に対するスロヴァキア人の反発を利用し、ヒトラーはスロヴァキアを独立させるのである。第2次大戦中、スロヴァキアはドイツの同盟国として戦うのである。

ドイツが第2次大戦に敗北すると旧チェコスロヴァキアは米ソの取引によりソ連の影響下に置かれる。再建されたチェコスロヴァキアはソ連の圧力の下で社会主義化される。中世以来数百年に亘って居住してきた数百万人のドイツ人はチェコスロヴァキアから追放され難民として西独やオーストリアに逃れるのである。

ソ連の同盟国たる社会主義国として存立したチェコスロヴァキアも共産党独裁体制への不満が顕在化する。ドブチェックが共産党の第1書記になる1968年にはプラハの春が始まる。社会主義体制の中での民主化を進めようとしたのである。しかし、この様な試みはソ連共産党の指導者ブレジネフ書記長の認めるところとはならず、8月にはワルシャワ条約機構軍のソ連、東独、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア軍が武力侵入し、この改革の試みを止めさせたのである。

1989年にベルリンの壁が崩壊すると社会主義諸国は連鎖的に崩壊していく。チェコスロヴァキアではヴェルヴェット革命と呼ばれる無血革命で社会主義が崩壊し議会制民主主義国家が成立するのである。指導者であったハーフェルは第2次大戦後のドイツ人追放は行き過ぎであったというニュアンスの発言もしたが根本的には既成事実を変える事は無かった。

新生チェコスロヴァキアでは早くもチェコ人とスロバキア人の利害が対立し、1993年にはチェコ共和国とスロヴァキア共和国に分離独立する事になったのである。チェコ共和国はプラハを首都とするボヘミア地方とブルノを首都とするモラヴィア地方に分かれる。筆者は社会主義時代と社会主義崩壊後のプラハは何度も訪ねた事はあるが、ブルノは通過するのみで訪問した事は無かった。今回ウィーンからの日帰り旅行を計画した。

ウィーン・ブルノ間は200km程で鉄道では2時間の距離である。社会主義崩壊後22年が過ぎてきている。どの様な状況となっているのか知りたかった。まず、鉄道の駅が第一印象を決める。ブルノ中央駅は日本でいえば戦後間もない頃の荒廃した駅を連想させた。駅舎自体はハプスブルク帝国以来のもので瀟洒しょうしやなものではあるが、その地下は闇市の様な印象であった。今では鉄道の役割が低下し、ビジネスマンたちは飛行機



図5. ブルノ中央駅

か自動車で旅する時代であるから、大きな金を賭けて改装する意義が無いのかも知れないが、英、独、仏、奥では鉄道駅の近代化が進んでいるので、これにはやや寂しい思いがした。

街の中は建物の改修が進みかなり美しい街になっている。意外だったのはドイツ語が殆ど通じなかった事だ。独・奥に近く経済交流も進んでいるとしたら、もっとドイツ語が普及しているかと思ったからだ。筆者がチェコに出張していた 1980 年代と 1990 年代には殆ど英語だけが使用されて、若い現役世代にはドイツ語は通じなかった。歴史的経緯を見れば、それは当然のことであつたらう。しかし、社会主義体制が崩壊して 22 年も経った現在には誠に意外であつた。



図 6. ブルノ中央広場

ブルノの街角でドイツ語で方角を尋ねたりしていたが、殆ど通じない。英語も余り通じない。その様な状況下、一人の女性が近づいて来て、非常に流暢なドイツ語で話しかけて来た。私のドイツ語を聞いて近づいて来たのだ。その人が流暢なドイツ語を話すのを聞いて、貴女はドイツ語が御上手ですねと言うと、当たり前です。私は^{メーリッシェ}モラヴィア・^{ドイチェ}ドイツ人ですものと言う。ブルノの人は^{ニヒテルン}冷静な人が多いですねと言うと愛想が悪いだけですよと言う。第 2 次大戦後ドイツ人は総て追放された筈であるのに、どの様にしてブルノに残れたのかを聞くと、両親、兄弟と共に追放されドイツ、オーストリアに住んでいたのだと言う。しかし、2004 年にチェコが欧州連合 (EU) に加盟して、定住ビザが不要となったので、ブルノに戻って来たと言うのだ。

何故ブルノに戻ったかと聞くと、ブルノは私の故郷だからという。筆者より 4 年年上の 1939 年の生れとの事で、彼女が生まれた時にはブルノは^{ドイチェスライヒ}独逸国内だったのだという。ブルノを追放されてからも望郷の思いは強く、母親と一緒にブルノに戻った。母親は 2 年半前にブルノで亡くなり、大聖堂の墓地で眠っているとの事で、偶々墓参りに来て筆者に遭ったとの事だった。

彼女の様な例が例外なのかどうかは分からないが、チェコの EU 加盟によりこの様な事が可能となっている事が大きな発見であった。

4) マリボール訪問記

マリボールはドイツ語ではマーブルクと言い、第 1 次大戦後の 1919 年スロヴェニア領となった街で、人口は 8 万人である。ウィーンからは鉄道で 3 時間半、グラーツからは 1 時間、



図 7. マリボール市役所前広場

オーストリア国境からは20分である。スロヴェニアは旧ユーゴスラヴィア連邦を構成した6共和国の一つである。

筆者は1970年代に旧ユーゴスラヴィアの外国貿易銀行であったユーゴバンカに円建やドル建で何回か資金調達の御世話をした事が有った。当時のユーゴスラヴィアは7から1の国と言われていた。7つの外国と接し、6つの共和国からなり、5つの民族からなり、4つの言語を有し、3つの宗教が支配的であり、文字はローマ字とキリル文字の2つが使用されているが、指導者は1人でチトー大統領であると言うのである。

第1次世界大戦の敗北でオーストリア・ハンガリー帝王国が崩壊した結果、ハンガリー領であったクロアチアとオーストリア領であったスロヴェニア、共同統治領であったボスニア・ヘルティゴヴィナが実質的にセルヴィアに併合されセルヴィア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国となり、更には南スラブ人の国と言う意味のユーゴスラヴィア王国となったのである。

第2次世界大戦ではドイツに味方し独立したクロアチア民族主義者(ウスタシャ)と連合国に味方したセルヴィア民族主義者(チェトニク)が血腥い内訌を続けたが、共産主義者チトーが指導したパルチザンがドイツから国土を解放した。ユーゴスラヴィアは複数の民族からなり、国家の統一を図るのが非常に難しかったが、チトーのカリスマによって統一を維持できた。従って、チトーなき後のユーゴスラヴィアは統一を維持出来ないだろうと言われていたものだ。

ユーゴスラヴィアの統一を困難にしたのは6連邦構成共和国の経済格差であった。もっとも進んでいたのはスロヴェニアで、それに次ぐのがクロアチアであった。スロヴェニアとクロアチアはハプスブルク帝国の版図であったので経済的にも発展していたのだ。セルヴィアとボスニア・ヘルティゴヴィナが中間的で、もっとも貧しかったのがマケドニアとモンテネグロ及びセルヴィアのアルバニア人自治州のコソボであった。これらの国は1878年のベルリン会議まではトルコ領であり、経済は余り発展していなかった。

ユーゴスラヴィアを分解に至らしめたのは、結局は経済問題であろう。国内に南北問題を抱えていたからだ。北部のスロヴェニアやクロアチアは連邦政府によって搾取され、その金を南部発展の補助金として使用され、自分たちには何の利益ももたらして呉れないとの不満が大きかったからだ。その頃からスロヴェニアの経済水準はオーストリアの貧しい州よりは遥かに高いと言われていたのだ。

筆者は1990年より1993年までウィーンに駐在した。その間1991年にはスロヴェニア、クロアチア等が独立宣言を發し、独立を認めぬセルヴィア等との内戦に突入して行くのである。スロヴェニアは民族的には90%以上がスロヴェニア人で、民族問題が殆どなく、経済水準も高いので、信用供与をしても余りリスクが無かった。筆者はウィーンより何度かスロヴェニアの首都リュブリアナを訪問し総理大臣や大蔵大臣と会見した。大蔵大臣と雑談していると祖母はウィーン出身だと言う。ウィーンからハプスブルク帝国の海港

であったトリエステやポーラに向かう汽車がリュブリアナを通過していたので、ウィーンとリュブリアナの人的交流は盛んであった様だ。日本での資金調達の委任状を貰ったのであったが、日本国内ではユーゴスラヴィアは内戦中で危ない国、とても金など出せないという反応で涙を呑んだのであった。

今回のウィーン滞在中に日帰りで行けるのはどこかと調べたところマリボールなら充分可能と判ったので早速訪問した訳だ。スロヴェニアはEU加盟であるのみならず、欧州共通通貨ユーロの導入国でもある。筆者がリュブリアナを訪ねていた頃はユーゴ・ディナールに変えてドイツマルクを使用していた程であった。ユーロ導入の前提条件を十分に満たしていたのであろう。ギリシャ、ポルトガル、アイルランド、スペインの様な信用不安の声は全く出ていない。

マリボールの街は中心部が歩行者天国になっており、建築物の印象は全くドイツ・オーストリアの街と言われても信じてしまうほど、綺麗で清潔であった。ハプスブルク帝国の時代には地主はドイツ人で都市に住み、農民はスロヴェニア人で農村に住んでいたのだから、マリボールの街がドイツ・オーストリア的なのは当然かもしれないが、メンテナンスを充分に行わねば直ぐ荒廃する。社会主義時代のプラハやブダペストがそうであった。

また、チェコやハンガリーに比べるとドイツ語が非常に通ずる。これは独・奥との経済交流が盛んな証拠であろう。もう一つ感心したのは便所が非常に清潔であった事だ。公衆便所や駅の便所は非常に清潔で、液体石鹼や手拭用の紙タオルを備えている。しかも無料なのだ。ドイツ・オーストリアでは便所は基本的には有料で、しかもマリボールで見られる様には清潔でない。ドイツの駅のトイレは鉄道が国営時代は無料のところが多かった。しかし、不潔でホームレスや麻薬患者の溜り場になっていた。民営化以降に基本的に有料トイレのみとなったのはホームレスや麻薬患者を締め出す目的もあるのであろう。マリボールでこの様な状況を保てるのは社会が安定しているからだろう。

鉄道の駅舎も大きくは無いが綺麗で小ざつぱりして清潔であった。ブダペストやブルノの駅舎とは全く異なっていた。これは政府が充分に経費を支出しているからであろう。



図 8. マリボール駅

また気付いたのは、住民が非常に洗練された服装をしている事であった。顔付もベオグラードで見るセルヴィア人の様にいかつい感じではなく、話している言葉がスロヴェニア語でなければドイツやオーストリアでよく見る顔付であった。体型的にもセルヴィア人の様に逞しい感じではなかった。歴史的にもスラブ人とゲルマン人の混血がかなり進んでいるのかも知れない。

5) フランツ・フェルディナントの遺跡

フランツ・フェルディナントはハプスブルク帝国（オーストリア・ハンガリー）の皇位継承者で1914年6月28日にサラエヴォで暗殺されて、そのことが第1次世界大戦を惹起させた悲劇の人物である。1893年には日本を訪問している。筆者はその訪日日記を和訳し最近刊行したばかりである。彼の所縁^{ゆかり}の地は殆ど訪れていたのであるが、その生家はまだ訪れた事はなかった。

フランツ・フェルディナントは1863年12月18日にグラーツに生まれた。現在のオーストリアは小さい国ながら9州からなる連邦共和国である。その1州シュタイアーマルクの首府である。筆者がグラーツを訪ねたのは唯の一度であったので、その生誕場所を確認する事はしていなかった。それで今回、その生家を訪ねようと試みたのである。

フランツ・ヨーゼフ1世皇帝には一人息子のルードルフ皇太子がいた。ところが1889年1月30日ウィーン郊外マイヤーリングで若い男爵の娘と心中してしまった。この事がなければフランツ・フェルディナントが皇位継承者となる事はなかった。他にもフランツ・フェルディナントは結婚の事で皇帝と対立し、その事で貴賤結婚という選択を迫られ、皇位継承者でありながら皇帝に疎まれ不幸な境遇にあった。

ルードルフ皇太子は国民に多大な人気を有していたが、フランツ・フェルディナントは暗い性格と見られ国民に非常に敬愛されていたとは言えなかった。現在のオーストリアにおいてもルードルフの名前は誰でも知っているのにフランツ・フェルディナントの名前はあまり知られていない。フランツ・フェルディナントは1863年12月18日グラーツで生まれた。ところがグラーツの若い人々はその事実を殆ど知らなかった。苦勞して老人たちに尋ねながら、やっとの事でその生家にたどり着いたのであった。

生家の建物は現在博物館になっている。建物



図9. フランツ・フェルディナントの生家



図10. フランツ・フェルディナントの生まれた部屋の窓



図11. フランツ・フェルディナント生誕の銘板

内部の壁にはフランツ・フェルディナントの銘板が掲げられていた。建物の外にも建物の謂れを記した看板があった。またその建物の1室の窓にはこの部屋でフランツ・フェルディナントが生まれたという表示もあった。フランツ・ヨーゼフ皇帝の弟であった、フランツ・フェルディナントの父、カール・ルートビッヒ親王が住んでいた建物が意外と^つ慎ましいものであったのも新発見であった。



図 12. フランツ・フェルディナント生家の建物の由来書き

グラーツの他にもリンツを訪ねた。過去において筆者が尋ねたのは2回だけで、殆ど通り過ぎただけであった。リンツもオーストリアの1州、上部オーストリア州の首府である。改めてリンツを訪ねた理由は三つある。第1にこの街の大聖堂にフランツ・フェルディナントを描いたステインド・グラスがあるからだ。ここでもフランツ・フェルディナントは有名ではなかった。大聖堂の横に売店兼案内所がある。そこで尋ねたのだが、全く分からないという。仕方がないので自分で大聖堂に入って無数にあるステインド・グラスを1枚1枚探索したが分からない。一旦は諦めて他の建物等を訪ねたのであるが諦めきれずに、もう一度大聖堂に戻った。観光客のグループが丁度出てくる場所であった。ガイドが1人いたので、彼女を訪ねた。さすがはプロでその場所を的確に教えてくれた。入れ替わりに大聖堂に入りガイドに言われた場所に直行した。その窓は筆者が一度訪ねた場所であった。1回目には分からなかったのに、今度はガイドに言われていたので直ぐ分った。写真を撮ったりして非常に嬉しかった。帰りに案内所によって係員にその場所を教えてやった。彼女は、私の夫は大学で歴史を教えているのに、そんな話は聞いたことが無かったと少し恥ずかしげであった。それほどにフランツ・フェルディナントが知られていないのだという事を確認した次第だ。

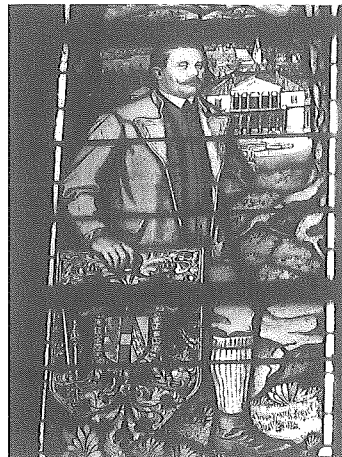


図 13. フランツ・フェルディナントのステインド・グラス

リンツを訪ねた第2の理由は、アードルフ・ヒトラーがこの街で成長したからだ。生まれたのはブラウナウという街であったが、少年期を過ごしたのはリンツの街だ。中等教育も殆ど



図 14. リンツの中央広場

ンツで受けたのだ。唯一の少年期の友と言われるクビチェックが書いた回想記にはリンツの街でヒトラーが少年期を過ごした状況が生き生きと描かれている。その中で描かれている街の状況は現在のものとあまり変わりがなかった。日本の街では殆ど歴史を感じられないのに、ヨーロッパの街ではどこでも歴史を感じる事が出来る。ヨーロッパを訪ねる楽しさはその点あるのだ。

リンツを訪ねた第3の理由は、そこに筆者の勤務する大学の提携校があるからだ。ヨハネス・ケプラー大学という。夏休み中なので教職員も、学生も殆ど居なかったが緑の多い快適なキャンパスであった。歴史があまりない大学ではあるが、将来の発展の余地は大きいであろう。学長室を訪ねた。学長は不在であったので秘書から大学案内等を受領しキャンパスを去ったのである。



図 15. ヨハネス・ケプラー大学のキャンパス

6) 欧州の医療機関

筆者は1943年生まれで、今年の誕生日には68歳となる。老化と言う事を今までは全く意識してこなかったが、今回の欧州訪問では自分が老人となった事を痛感させられた。

まず最初の訪問地パリで転倒し、右膝を強打し歩行が困難となった。特に階段の登り下りには難渋した。その上風邪をひき38℃程度の発熱をした。さらにドイツ、オーストリアを訪問する予定であったので、大事を取ってパリの病院を訪問した。セヌ川の中に浮かぶシテ島の中で有名なノートルダム寺院とパリ警視庁に挟まれた神の館^{オテル ディユー}病院だ。パリ最古の病院で今では市立病院である。緊急外来を受診した。フランス語検定には2級にしか合格していないので、果たして、フランス人の医師と意思の疎通が出来るかと若干の不安があったが、何でもやってみるものだ。医師がゆっくりしたフランス語で話してくれた所^{せい}為もあり、一つの単語を除いては問題なく会話できた。分からなかった単語は嗽^{うがい}をするという言葉だったが、医師が身振りで示してくれたので理解できた。驚いたのは診察の方法で1時間以上かけて子供のときからの病歴を総て聴きながら診察してくれた。内科医のみならず外科医も来てくれて膝の打撲傷も診てくれた。日本の病院では1時間以上待たされて5分間の診療と言う事が多いが、パリでは非常に丁寧に診て貰えて非常に感激した。処方箋を書いて貰い退出しようとして受付で支払額は幾らか

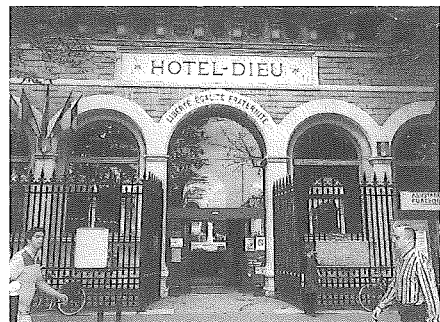


図 16. パリ、神の館病院

と聞くと、後ほど請求書を日本に郵送すると言う。受付の際、旅券のコピーは取られていたとは言いながら、患者が外国人で踏倒しされる危険もあるのに、何と人を信用してくれるのかと更に感激したのだ。

パリの後ベルリン滞在中にまた負傷した。都心から離れたベルリン東部である有名人の墓を訪ねようとして国電のプラットホームで電車を待っていた。郊外では電車の編成が短く待っていた場所から 20～30 メートル先に電車はとまった。運転間隔もそこでは 20 分毎だ。その電車に乗ろうとして走ったところ、右膝の故障のため右足が動かず纏れた、前方に倒れた。ゴンと言う音がし、血が流れた。右頬から右顎にかけて強打した。唇が切れ、左側の歯の感覚が失われた。門歯も欠けた。筆者には 1 本の入歯もないが、左側上下の歯が総て失われるのではないかと不安が過った。不幸中の幸いであったが、目と鼻には損傷がなく眼鏡も壊れなかった。

そのプラットホームからベルリン大学医学部附属病院に直行した。緊急外来の受付に到着したが、直ぐ診てくれる訳ではない。まず、旅券をコピーされ、100 ユーロの前払金を支払わされた。トリアージュは看護師が行い、患者は赤(非常に重篤)、黄(かなり重症)、緑(軽症)、青(殆ど正常)に区分され、赤と黄に区分された患者のみが緊急外来で診察して貰える。筆者の区分は黄であった。赤患者を優先するので若干待たされた。ドイツ語検定はかなり昔 1 級に合格しているので自信があったのだが、医師に、貴方のドイツ語は完璧だと言われた。人間歳を取っても褒められると嬉しいものだ。痛みが軽減した様な気がした。外傷があったので破傷風の予防注射を射たれた後で、右顎部の CT 写真を撮って貰い、診てもらったところ、顎の骨には異常がないが、歯については日本で歯科医に掛かるように言われた。ここでも前払金以外の支払はなく、請求書を後ほど日本に郵送すると言う。フランスのみならずドイツでも人を信用するのだと感じた。



図 17. ベルリン大学病院のトリアージュ (患者振分) の看板

ベルリン滞在後、今度はウィーンに滞在した。ここでは病院に行くことはあるまいと思っていたのに、その期待は裏切られた。新しい革靴を履いていたため右足の甲が擦れ、皮膚が切れて傷となり、右足が腫れて靴を履けなくなった。それでウィーン市立ルードルフ病院と言う大病院を訪れた。幸いにして緊急患者として皮膚科で診断して貰う事が出来た。化膿止めの塗薬を処方され、暫くの間、靴を履かなければ、その塗薬で治癒すると言われた。ウィーン滞在の残りの期間は靴を履かず、屋内のみならず、外出にもスリッパを用いた。帰国日には何とか靴を履くことが出来た。この病院でも 1 銭も払わなかった。請求書は日本に郵送されるのだ。仏、独のみならず埃でも人を信用する。果たしてこれはヨーロッ

ると矢張り右側を掴めと書いてあるので追越しは左側となる。英、独、澳と同一であった次第だ。

8) ベルリン王宮再建の進展度

ベルリンの王宮がフンボルト・フォーラムと言う名前で再建される予定であるが、国費だけでは不足するので民間からの寄付を募っている話は前回までに何回かした。その募金活動本部とベルリン王宮の展示場兼売店は昨年までは王宮跡からは少し離れたハウスフォークタイ広場にあったが、今夏、王宮跡に接した場所に移転し、最上階には食堂と展望室を備えたフンボルト・ボックスと言う建物を建てて、移転した。

そこから王宮再建工事が見れる訳である。ポツダム広場の再建の際にもポツダム・ボックスと言う展望台が建てられたから、フンボルト・ボックスが建てられたのは工事が間もなく始まると言う事だろう。



図 20. フンボルト・ボックス、左奥の塔はベルリン市役所

Mitteleuropäischer Sommer 2011

Hajimu WATANABE

College of Science and Industrial Technology

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashikishi, Okayama, 712-8505 Japan

(Received October 1, 2011)

In diesem Sommer habe ich Brünn, die Hauptstadt von Mähren besucht. Vor dem Krieg wohnten viele Deutsche dort, aber nach dem Krieg wurden sie vertrieben. Seitdem sprach man dort kaum noch deutsch. Als ich geschäftlich in den achtziger und neunziger Jahren Prag besuchte, wurde nicht auf deutsch sondern auf englisch kommuniziert. Nach 1989 ist die Situation jedoch komplett verändert. Die Beziehung zwischen Tschechien und seinen Nachbarländern, d. h. Deutschland und Österreich ist viel stärker geworden.

Deshalb erwartete ich, daß man in Brünn viel besser auf deutsch kommunizieren würde. Die Realität war aber doch ganz anders als meine Erwartungen. Wenn ich auf deutsch fragte, kam keine Antwort, und wenn, dann eher auf englisch. Einmal, als ich solche Probe machte, kam doch ganz plötzlich ein fließendes Deutsch zurück. Als ich sagte, „ Sie sprechen perfekt deutsch! “ reagierte sie, „ natürlich, weil ich mährische Deutsche bin.“ Ich fragte, ob auch nach dem Krieg Deutsche in Brünn wohnten. Sie erklärte mir, daß sie selber auch vertrieben worden sei und in Deutschland sowie in Österreich gelebt habe, erst 2004 mit ihrer Mutter zurückgekommen sei, nachdem Tschechien ein EU-Mitglied geworden war und sie dann ohne Visum dort hatten wohnen können.

Ich fragte sie nach dem Grund ihrer Umsiedlung nach Brünn. „Weil Brünn meine Heimat ist. Als ich geboren wurde, gehörte Brünn zum Deutschen Reich“, antwortete sie. Ich weiß nicht, wie viele Deutsche nach Brünn zurückgekommen sein mögen. Solche Fälle waren mir bisher nicht bekannt. Vielleicht bedeuten sie, daß deutscher Nationalismus ganz unauffällig zurückkommen ist.